

甌島の過疎化と出郷者の集団形成再考

田島 康弘

(1994年10月17日 受理)

Reconsideration on Depopulation in Koshiki Islands
and Group Formation of Migrants in Urban Areas

Yasuhiro TAJIMA

目次	頁
第1章 はじめに	31
第2章 甌島における人口数の変化	32
第1節 村別人口の変化	32
第2節 集落別人口の変化	33
第3節 中学校卒業人数の変化	34
第3章 人口構成の検討	36
第1節 村レベルの人口構成の変化	36
第2節 集落レベルでの人口構成の検討	38
第4章 出郷者集団の形成とこれをめぐる研究の動向	39
第1節 出郷者の行先と各地の集団	39
第2節 甌島郷友会研究の成果と今後の課題	41
第5章 結語	44

第1章 はじめに

本稿は、甌島の人口現象とくに人口数および人口構成の変化、人口移動などの解明とその持つ意味の考察を行い、これらと関連した出郷者の会＝郷友会を対象とする研究動向について若干の整理を行なおうとするものである。

社会集団の空間的現象の解明が、社会地理学が目ざすものである¹⁾とすれば、本稿はこの意味での社会地理学的研究の一環である。この場合、本研究における社会集団とは、都会に居住する出身地を同じくする者の集団を意味しており、その中でも集落単位のまとまりに、筆者はとくに注目している。

ところで、都会において形成される地方出身者の集団の中で、圧倒的多数は市町村レベルのものであって、集落レベルのものは「南島と北陸とに集中的に見られる」²⁾ことが松本により指摘されているが、甌島はこのどちらでもないにもかかわらず、集落レベルの会が関西や関東においては形成されており、この原因の解明もなされねばならないであろう。

また、近代以後、日本の農山漁村は都会とのかかわりを多かれ少なかれ密にしてきており、両者の関連は戦後、とくに日本経済の「高度成長期」に、農村部から都市部への大量の人の移動という形であらわれた。これ以前の戦前、とくに日本の工業化の時期にも、出稼ぎ的移動を中心としつつも一定量の定住を含んだ移動の形態があり、これ以後にも「流出」と「還流」双方の動きがある。

そして、出郷者集団の形成や活動が見られるのである。こうした動き全体を時間的かつ空間的に把握し整理することも、社会地理学的研究にとってはなされねばならない課題のひとつであろう。

本稿はこれらのことの一部を甑島に関して行い、さらに、研究の現段階と今後の方向について考えようとするものである。

そこで、第2章では、甑島における人口数の変化を2～3の視角から考察する。第3章では、甑島の人口構成の変化に着目し、人口構成の変化とその持つ意味について考察する。第4章では、甑島出身者の会の形成とこれをめぐる研究動向について、若干の考察を行い、問題点や今後の課題の整理を行いたい。

第2章 甑島における人口数の変化

第1節 村別人口の変化

各年の国勢調査のデータから村別人口の変化をみると、次のことが言えよう(第1表、第1図)。

1) 戦前における各村の人口に、大きな変化はなかった。

第1表 甑島各村の世帯数及び人口の変化

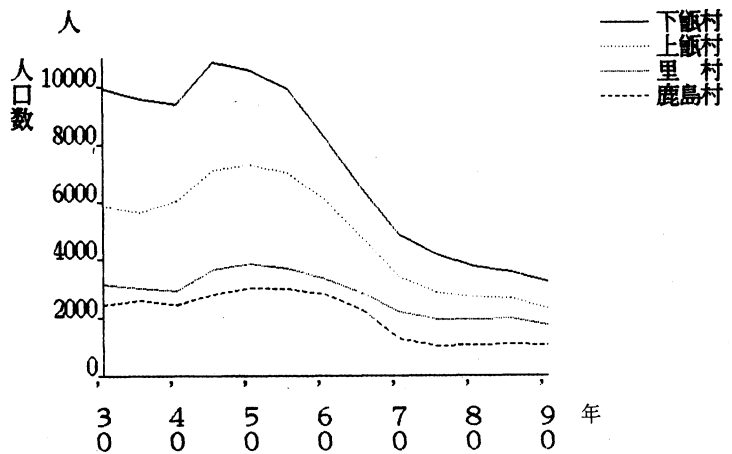
西暦	元号	里村		上甑村		鹿島村		下甑村		旧下甑村	
		世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
1920	大正9	631	3009	1139	5517					2349	11535
	25	14	655	3017	1171	5509				2387	11745
1930	昭和5	647	3174	1203	5878		2446		9937	2457	12383
	35	10	620	3029	1221	5652	2589		9563	2540	12152
1940	15	601	2928	1184	6053		2433		9401	2423	11834
	45	20	654	3573	1265	7117				2562	13483
	47	22	725	3678	1371	7115		2820	10850	2767	13670
1950	25	759	3870	1392	7296	574	3032	2237	10546		
	55	30	723	3692	1403	7009	585	3010	2201	9918	
1960	35	696	3357	1381	6091	606	2811	2121	8237		
	65	40	655	2834	1221	4730	554	2254	1852	6438	
1970	45	620	2183	1102	3426	493	1277	1700	4864		
	75	50	614	1926	1092	2877	431	1023	1620	4176	
1980	55	631	1920	1120	2728	462	1028	1554	3752		
	85	60	673	1967	1120	2651	497	1072	1518	3577	
1990	平成2	636	1753	1017	2315	487	1033	1420	3247		

注：昭和24年4月 下甑村から鹿島村が分離した。これ以前の両村の人口は、下甑村(1993)：村勢要覧から知り得た範囲で記入した。

資料：各村の村勢要覧、上甑村郷土誌により作成

2) 戦後のまもない時期に各村とも人口数はピークに達した。これは下甌村では1947年、他の3村では1950年である。

3) ピーク時以後、各村とも人口減少をみているが、とくに1955年から'70年の時期の減少が著しく、この間の人口減少の割合を村別にみると、鹿島村(42.4%)、上甌村(48.9%)、下甌村(49.0%)、里村(59.1%)となつて、里村を除く3村は人口が半数以下となつた。



第1図 甌島の村別人口の変化

4) 1975年以降の動向、(すなわち1975年と1990年の人口減少の割合)をみると、下甌村(77.8%)と上甌村(80.4%)は減少を続けているが、鹿島村(101.0%)は横ばいであり、里村(91.0%)もこれに近いと言えよう。

5) 大きく全体的に、この間(1950年と1990年)の人口減少の割合をみると、下甌村(30.8%)、上甌村(31.7%)、鹿島村(34.1%)の3村でとくに著しく、里村(45.3%)は相対的には、ゆるやかであったことがわかる。

以上のことを確認して、先へ進みたい。

第2節 集落別人口の変化

以上の人口の変化を集落別にみると、集落によっても差のあることがわかる³⁾(第2表、第2図、第3表、第3図)。1955年と1990年の人口減少の割合から、集落の人口減少は次の3つのタイプに

第2表 上甌村の集落別世帯数および人口の変化

西暦	元号	中甌		江石		平良		小島		瀬上		桑之浦		中野									
		世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口								
1950	25																						
	55	30	362	1815	905	299	1421	715	286	1335	664	134	692	365	180	988	493	79	439	222	63	319	165
1960	35	360	1625	776	296	1146	535	281	1170	557	131	574	297	176	899	454	79	395	185	58	282	144	
	65	40	341	1354	632	214	716	321	245	917	420	121	468	232	172	787	388	79	321	149	49	167	71
1970	45	318	1021	459	165	451	201	236	697	311	114	314	139	158	610	292	70	220	100	41	113	47	
	75	50	331	918	424	153	369	170	232	594	265	115	284	122	152	456	220	67	155	71	42	101	43
1980	55	367	915	442	151	329	146	234	572	272	117	272	127	146	408	194	59	142	68	46	90	46	
	85	60	367	921	446	142	310	144	238	545	264	110	263	125	149	377	190	58	127	57	56	108	59
1990	H2	341	810	383	129	262	118	208	449	216	108	257	118	139	329	157	53	127	55	39	81	37	

資料：村勢要覧(1982年、1987年など)及び役場資料、1990年国勢調査により作成

分けられるように思う。

A) 人口の減少が40%台にとどまった集落

里(47.5%), 中甌(44.6%), 長浜(43.9%)の3集落。

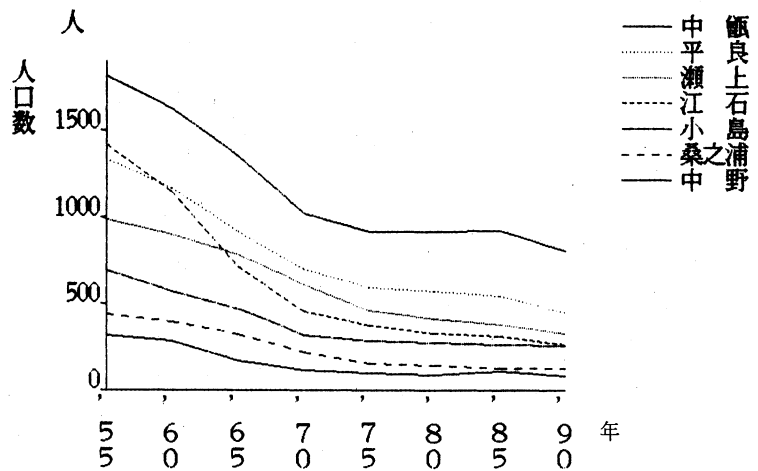
B) 人口が30%台にまで減少した集落

小島(37.1%), 平良(33.6%), 瀬上(32.3%), 鹿島(34.3%), 片野浦(36.3%), 手打(33.4%)の6集落。

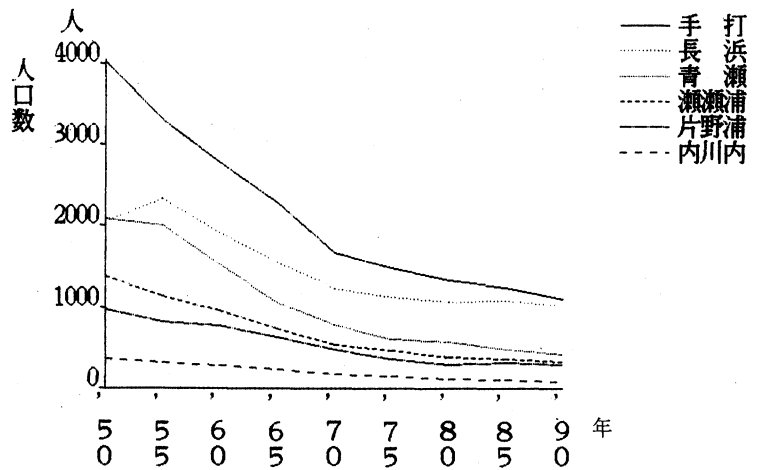
C) 人口が20%台以下に減少した集落

江石(18.4%), 桑之浦(24.8%), 中野(25.4%), 青瀬(20.9%), 内川内(25.1%), 瀬々野浦(28.4%)の6集落。

後にみる郷友会の形成や強さとこの人口減少の割合とは関係がないと言いきれるであろうか。一定の考察が必要のように筆者には思われるのである。



第2図 上甌村の集落別人口変化



第3図 下甌村集落別人口変化

第3節 中学校卒業生数の変化

人口の変化を捉える一つの指標とし

第3表 下甌村の集落別世帯数および人口の変化

西暦	元号	手打		片野浦		瀬々野浦		青瀬		長浜		内川内	
		世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口
47	S22	815	4027	177	900	283	1374	439	2081	439	2048	76	359
1950	25												
55	30	740	3302	166	813	262	1145	434	2006	525	2333	74	319
60	35	716	2784	172	773	252	959	415	1527	494	1913	72	281
65	40	640	2278	176	634	228	739	331	1058	411	1544	66	230
70	45	563	1669	168	475	214	540	296	774	349	1230	69	176
75	50	553	1473	151	357	214	466	258	605	280	377	67	149
80	55	535	1322	137	293	192	383	254	574	280	376	60	111
85	60	536	1240	132	314	190	359	229	481	242	378	53	102
1990	H.2	503	1103	132	295	170	325	192	420	203	380	43	80

資料：第2表と同じ

第4表 中学校卒業者数及び進学率の変化

年 度 西曆 元号	里村	上甌村	鹿島村	下甌村	合計	上甌村		下甌村	
						進学者	進学率%	進学者	進学率%
1950	S.25								
51		213							
52		221							
53		196							
54		167							
55		175							
56		197				24	12.2		
57		173				17	9.8		
58		154				20	13.0		
59		180				24	13.3		
60	5.35	92	126	52	195	465	17	13.5	
61		69	118	34	177	398	18	15.3	
62		85	141	56	147	429	29	20.6	31 21.1
63		112	170	54	237	573	22	12.9	45 19.0
64		99	186	73	262	618	28	15.1	55 21.0
65		112	164	52	215	543	39	23.8	46 21.4
66		113	183	45	213	554	44	24.0	66 31.0
67		100	163	48	153	464	49	30.1	36 23.5
68		108	161	45	209	523	57	35.4	50 23.9
69		98	143	37	146	424	42	29.4	53 36.3
70	S.45	97	151	38	181	467	64	42.4	63 34.8
71		75	90	24	158	347	57	63.3	62 39.2
72		81	116	19	132	248	43	37.1	70 53.0
73		80	93	24	138	335	66	71.0	77 55.8
74		53	83	26	111	273	61	73.5	95 85.6
75		50	74	16	130	269	66	89.2	87 66.9
76		35	63	17	110	225	51	81.0	80 72.7
77		31	51	21	81	184	43	84.3	64 79.0
78		34	61	12	102	209	52	85.2	81 79.4
79		30	47	12	66	155	35	74.5	56 84.8
80	S.55	26	32	13	72	143	25	78.1	63 87.5
81		26	53	7	47	133	44	83.0	41 87.2
82		19	26	11	49	105	23	88.5	43 87.8
83		32	27	4	56	119	27	100.0	45 80.4
84		19	26	3	37	85	22	84.6	33 89.2
85		20	31	5	43	99	30	96.8	42 97.7
86		43	33	9	43	128	31	93.9	40 93.0
87		36	22	7	33	98	21	95.5	32 97.0
88		30	40	7	42	119	39	97.5	37 88.1
89		28	28	7	41	104	28	100.0	38 92.7
90	H.2	24	33	10	36	103	33	100.0	34 94.4
91		27	22	15	25	89	21	95.5	21 84.0
92		26	17	7	24	74	17	100.0	21 87.5
93		20	22	8	33	83	22	100.0	32 97.0

注：この表の進学率の計算には進学・就職者を除いており従って、これを含めた実際の進学率はさらに高くなる。
資料：鹿児島県統計年鑑（各年度）、上甌村100年、下甌村村覧要覧により作成

て、中学校卒業生数の変化をみておこう(第4表, 第4図)。

1958年以前の上甕村を除く他の3村のデータが欠落しているので、この間の他の3村の変化も上甕村とほぼ同様の傾向であると仮定して、戦後の動きをみると、全体的にはほぼ一貫して減少傾向にはあるものの、1965年頃までは、ほぼ横ばいの傾向を保ってきており、それ以後から1975年ぐらいの間に急激な減少がみられたと読みとれるように思う。1975年以降とくに80年以降は、

ほとんど横ばいの状態と言えようが、下甕村では75年から80年代のはじめにかけて、なお減少傾向が続き、78年度には4校が80年度には2校がそれぞれ合併している。逆に、里村では横ばいから増加の傾向すらみられ、90年以降の卒業生数は4村中で最も多いときもある。

以上の動きは人口の動きとほぼ対応していると言えようが、人口の減り方と比べて、やや遅れ気味のずれがあるようにも思われる。また、他と多少異なる、近年の里村の動き方なども、30~40年代の壮年層の定着を暗示する動きとして注目されよう。

第3章 人口構成の検討

性別・年齢別人口の構成は、その村の特色を示す一つの指標と言えよう。本章ではこれを示す人口ピラミッドについて検討しよう。

第1節 村レベルの人口構成の変化

まず、村全体の人口ピラミッドを5年毎に作成し、比較してみよう。この場合、甕島4村の中では下甕村の人口減少が、先に見たように最も著しいので、下甕村の場合を例にとって検討する(第5図)。

1) 1946年~55年

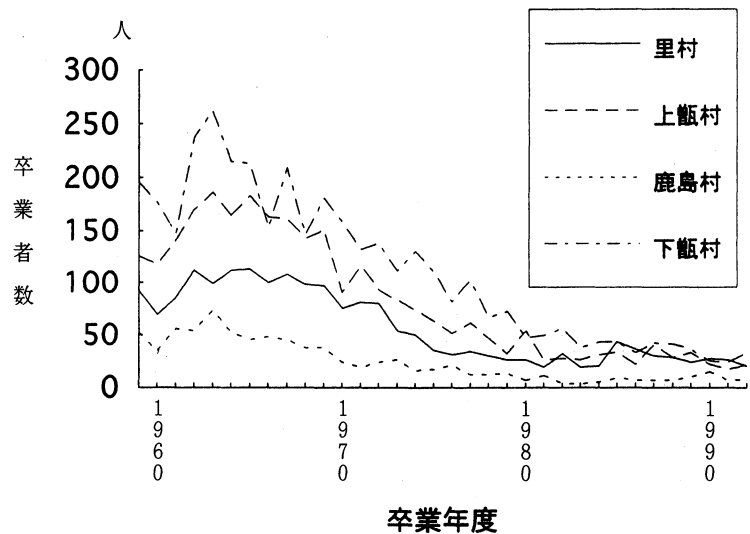
1950年のデータが得られないので、そのかわりに1946年4月のデータを使用する。

①1946年の人口ピラミッドの形は、男性壮年層(20~40代)のへこみを除くとほぼピラミッド型をしており、これが過疎化開始以前の姿であると思われる。

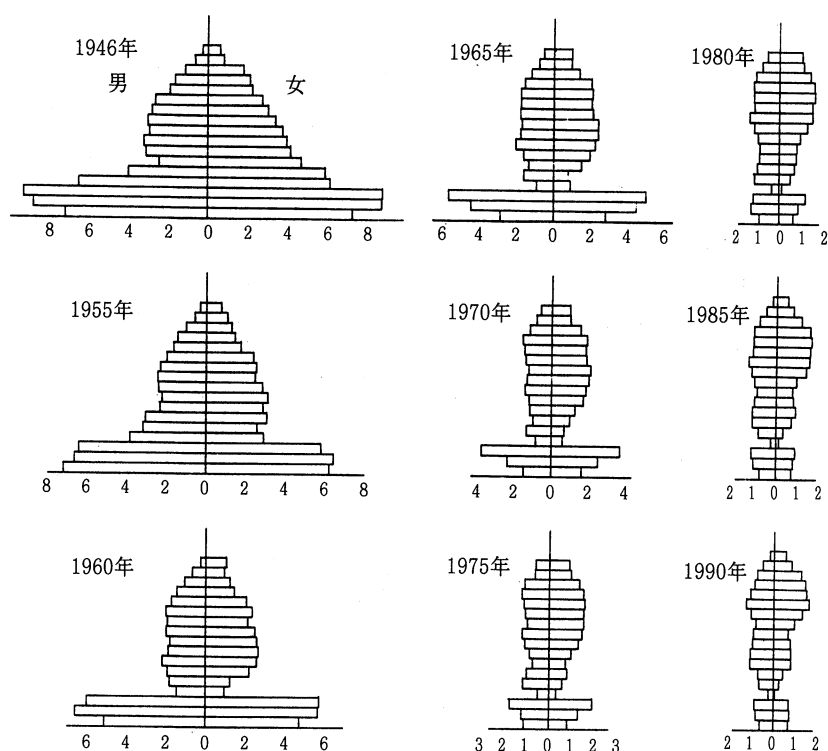
②男性壮年層のへこみの原因は、1) 戦争の影響、2) 出稼ぎによるための2つが考えられる。

③1955年の人口ピラミッドの方は、さらに女性若年層(10代後半~30代前半)のへこみもみられる。

これは、1) 出稼ぎ、2) 就職のよる流出等のためであると考えられる。



第4図 村別中学校卒業生数の変化



第5図 下甌村における人口構成の変化(単位100人)

この間は、青年期女性の減少を特に顕著とした文字通りの全階層的減少期と特色づけられよう。

2) 1955~60年

この2つの人口ピラミッドを比べると、高齢者層を除きほぼ全階層的に減少がみられ、とくに、青壮年層なかんずく10代後半~20代の青年層の減少が目立つ。又、若い女性の絶対数が著しく減少している。この時期は青年層の減少をとくに顕著とした高齢者層を除く全階層的減少期と特徴づけられよう。

3) 1960~65年

60代以上の高齢者を除き、全年齢階層的にはほぼ同程度の減少が見られ、とくに14歳以下の減少が著しい。

この時期は、子供層の減少をとくに顕著とした高齢者層を除く全階層的減少期と言うことができよう。

4) 1965~70年

上記の3)とほとんど同じ傾向で、高年齢層を除き全階層的な減少を示し、とくに子供層で顕著である。

5) 1970~75年

青壮年層のこの期間の減少はほとんどみられず、14歳以下の子供層のみ大きな減少を示している。これは、子供を生み育てる層の社会減少に伴う子供層の自然減少を意味するものと思われる。

6) 1975~80年

上記と同じく14歳以下層の減少の他、15~19歳層の減少も目立つが、この他ではあまり変化がない。

7) 1980~85年

40代女性の減少がやや目立つ程度で、この他はほぼ同形である。

8) 1985~90年

子供層、20代、50代で多少の減少が見られるが、ほぼ同形と見ることもできよう。

以上をまとめてみると、1950年代前半までの青年期女性の減少を顕著とし、高齢者の減少をも含む、文字通りの全階層的減少的(第Ⅰ期)、50年代後半の青年層の減少を顕著とした、高齢者層を除く全階層的減少期(第Ⅱ期)、60年代の子供層の減少を顕著とした、高齢者層を除く全階層的減少期(第Ⅲ期)、70年代の14歳以下層の減少のみが目立つ子供層減少期(第Ⅳ期)、80年代の子供層の減少すら停止した無変化期(第Ⅴ期)の5つの時期に区分できよう。このうち、第Ⅱ期と第Ⅲ期とは、高齢者層以外の全階層で減少が見られた時期として、まとめて扱うことも可能であり、そうすると、全階層減少期、青壮年と子供層の減少期、子供層のみの減少期、無変化期の4期の区分となろう(第5表)。

第5表 人口構成の変化の時期区分

時期	年	子供層 0~14歳	青壮年層 15~64歳	高齢者層 65歳~	特 徴
I	1946~55	—	— (とくに青年期女性)	—	全階層的減少期
II	1955~60	—	— (とくに青年層)	—	青壮年層及び子供層減少期
III	1960~70	— (とくに子供層)	—	—	〃 〃 〃
IV	1970~80	—	—	—	子供層のみの減少期
V	1980~90	—	—	—	無変化期

注：—は減少を示す

第2節 集落レベルでの人口構成の検討

人口構成は集落のちがいによってもかなり異なる。そこで、1990年における甕島15集落(上甕村7, 下甕村6, 里村1, 鹿島村1)の人口構成について検討しよう(第6図)。

まず、全体にはほぼ共通することは、1) 59歳以下の労働力人口が少なく、とくに青年層(15~29歳)が極端に少ないこと、2) 逆に、60歳以上の各層はほぼピラミッド型をしていて人数も多く、とりわけ女性の人数が男性をうわまわっていること、の2点である。

次に、これら各集落の人口ピラミッドは、主としてその規模の違いから、大, 中, 小の3つに区分することができよう。すなわち、大規模型は里, 鹿島, 中甕, 長浜, 手打の5つであり、中規模型は江石, 瀬上, 小島, 平良, 青瀬, 瀬々野浦, 片野浦の7つであり、小規模型は中野, 桑之浦, 内川内の3つである。

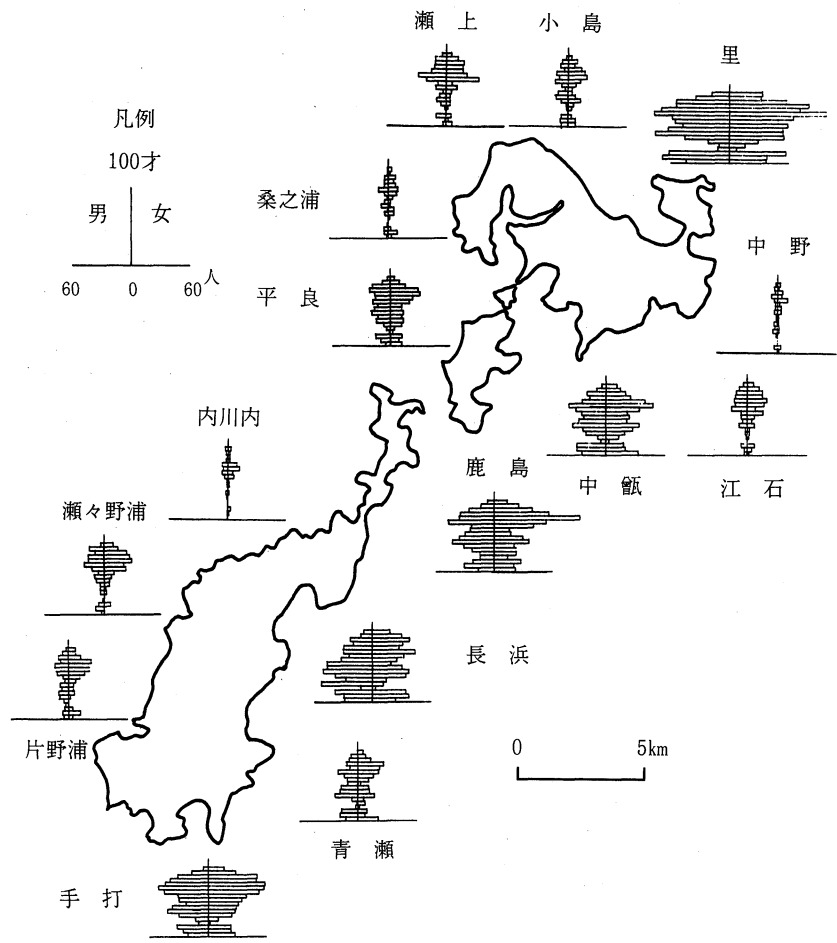
大規模型の5集落はいずれも各村の中心集落であり、長浜以外の4集落には村役場が置かれている。人口ピラミッドの特色では、規模が大きいことその他、子供層及びその親の世代に当る30代後半を中心とした壮年層がかなり存在することがあげられよう。また、長浜は男性の青壮年層とくに20代前半層がきわだって多い。これは、長浜地区に存在する航空自衛隊関係者の存在によるものと思われる。事実、集落内における鉄筋四階建ての自衛隊関係者の住宅群は目をひいている。

中規模型集落は高齢者中心の4集落(江石, 瀬上, 瀬々野浦, 片野浦)と30~40代を一定程度含

む3集落（小島，平良，青瀬）との2つに，さらに分けられよう。水産業関係者の存在の差が，この違いとなっているものと思われる。

小規模型集落の中も，50代以上層が中心の内川内と，これ以下層をも含む中野，桑之浦との2つに分けられるかもしれない。

ところで，以上の人口構成の差異を，先に扱った集落別人口の変化と対比させてみると，5つの大規模型集落の人口減少は，40%台のAタイプ（里，中甌，長浜）から30%台のBタイプ（鹿島，手打）に，7つの中規模型集落の人口減少は，Bタイプ（小島，瀬上，平良，片之浦）から20%台以下のCタイプ（江石，瀬々野浦，青瀬）に，3つの小規模型集落の人口減少は，いずれもCタイプ（中野，桑之浦，内川内）に属して



第6図 甌島の集落別人口構成

資料：1990年国勢調査

に属して、集落規模が大きいほど人口減少の程度がゆるく，小さいほど激しいという一定の規則性がみられる。

しかし，例えば中規模型集落の中でも，小島や片之浦と江石や青瀬との間では，人口減少の程度にかなりの差があるのであり，この意味では，上述の傾向はそれほど厳密なものであるとは言えないだろう。

第4章 出身者集団の形成とこれをめぐる研究の動向

第1節 出身者の行先と各地の集団

戦後，甌島を離れて出郷した人々がどこへ行っているのか，その行先の全体を正確に把握することは困難である。以前は中卒後の就職者が多く，転職統計または各中学校の調べからその行先を

る程度把握することができたが、近年は、中卒者の多くが県内の高等学校に進学し、その後の進路については把握が困難になっている。

そこで、ここでは、1965年以前の中卒就職者の役割が高かった時期の中卒者の行先を既存の文献から、また、1975年以降の高校進学者の割合が高くなった時期の居住地を上甕村の成人者名簿の整理から、それぞれ把握することによって、青年層転出者の動向について検討する。資料がいずれも部分的で制約はあるが、一定の傾向は読みとることができよう(第6表)。

第6表 中学校卒業者の行先の変化

	1961年 ¹⁾				1976~81年 ²⁾			
	男	女	計	割合	男	女	計	割合
				%				%
自宅	24	5	29	11.3	40	35	75	14.3
県内	29	20	49 ³⁾	19.0	28	63	91	17.4
九州	1	0	1	0.4	9	8	17	3.2
近畿	41	58	99	38.5	123	98	221	42.2
中部	24	46	70	27.3	20	24	44	8.4
関東	5	2	7	2.7	42	26	68	13.0
その他	0	2	2	0.8	5	3	8	1.5
計	124	133	257	100.0	267	257	524	100.0

注1) この数字は当時島内に存在した10の中学校のうち、次の5つの中学校の合計である。里、上甕、平良、片之浦、手打の各中学校。

2) この数字は上甕村の成人者名簿によるものである。

3) 進学者43名(男24, 女19)をすべてここに含めて整理した。

資料: 藤岡謙二郎編(1964): 離島の人文地理, P.168. 及び, 上甕村成人者名簿(1976~81年)により作成。

まず、1961年の中卒者の行先をみると、関西、中部、県内、自宅の順に多く、以上の4つでほとんどすべてを占めていた。とくに、関西や中部とくに中部へ行った者の中での女性の比率が高かった。なお、県内へ出た者の9割近くは高校進学者であった。

つぎに、1975年以降の出身者(青年層)の居住地をみると、関西が最も多いことには変わりはないが、次いで県内、自宅、関東の順であり、中部が大きく減少(27.3%→8.4%)し、関東が大きく伸びている(2.7%→13.0%)。また、男女別に注目してみると、県内居住者の中での女性の比率の高さおよび関東居住者の中での男性の比率の高さが目立っている。

以上の考察から、甕島出身者の中の青年層の行先は、関西が最も大きな割合を占めてはいるが、鹿児島市を中心とする県内も(とくに女性において)少なくなく、また、東京も(とくに男性において)次第にふえてきていると言えるであろう。

事実、鹿児島市には、甕島出身者により作られる「甕州会」が、郷里との連携を保ちつつ活動しており、会員数も最近15年間に603人から647人へと全体としては増加している⁴⁾。

また、関東には、中津会(中甕)、江石会、瀬上会(以上、上甕村)、東京鹿児島会(鹿島村)、東京長浜会、手打会(以上、下甕村)の少なくとも6つの集落単位の会の存在が知られており、相当数の出身者の存在を知ることができる。

さらに、出郷者が最も多い関西についてふれると、1982年に筆者が関西で行ったききとりによれば、次の11の郷友会が存在していた。すなわち、近畿地区里村郷友会(里村)、関西中津会、鹿児島県江石会、関西浦内会(以上、上甕村)、関西鹿の子百合会(鹿島村)、関西長浜会、青瀬会、内川内麦の芽会、関西西山郷友会、近畿子岳会、関西手打会(以上、下甕村)の合計11である。

これらの会は、基本的には集落を単位に形成されていると言えようが、細かくみるといくつかの問題に気づくのである。すなわち、上甌村の場合以外はすべて集落単位でこれらの会が形成されているが、上甌村の場合は、集落単位で形成されているのは江石だけであり、中津会の中甌を主としつつも中野の出身者をも、また、浦内会は小島、瀬上、桑之浦の3集落の出身者を含んでいて、集落単位とは言い難い。さらに、平良集落には出身者の会が形成されていないということも、甌島における一般的傾向とは異なっていて特異であり、注目される。

以上に関連して、さらに問題を提起しておく、関西及び関東では、出身者の会の単位がほぼ集落レベルで作られているが、鹿児島市では村レベルをもとびこえて、4村出身者で一つの会が作られている。この理由の究明も一つの検討課題であろう。また、甌州会の存在が逆に甌島4村の合併の気運をかもし出す要素をも持っているようで、こうした郷友会の「反作用的機能」の検討も別の課題となるだろう。

もう一つの問題点を指摘しておきたい。筆者は先に尼崎を中心に活動する関西の「江石会」について検討したことがある⁵⁾。その際、退職後の帰村者の存在についてふれたが、今回の下甌島でのききとり⁶⁾によって、下甌村瀬々野浦も高齢者中心の集落で、退職帰村者が区長をはじめ集落や村の中心的役割を果たしていることを知ることができた。

このように、出郷者の中には、とくに長男など、村との関係を保ち続けている者もおり、時と場合によっては⁷⁾帰郷する可能性を持つ者が常に存在するのである。彼らの意識の中でも、お互いに相手の居住地の選挙などには関心が高く、「電話の一本」がかかったりするとも言われ⁸⁾、どちらに居住する者も他方を気にしているという現実がある。「遠くの親戚より近くの他人」ということわざもあるが、人と人との結びつきの方が強く働くことも時にはあるだろうし、とくに、彼等の場合は後者の関係がきわめて強いように思われる。この点は、先に別稿で筆者が指摘した点とも似ている⁹⁾。

甌島の集落の中の少なくともいくつかは、退職帰村者によって支えられるという状況が、今後も続くであろう。近年においても、入学者数の減少により、集落の小学校が廃止されそうになった時、出郷者の会に頼んで、数人の小学生をこちらの小学校に入学させるという里親制度を実現し、廃止されることをふせいだというような大変な努力も、彼らは行っているのである¹⁰⁾。

第2節 甌島郷友会研究の成果と今後の課題

甌島の関西における郷友会については、その後、松本・丸木らのグループによって、関西西山郷友会と、その会員の出身集落である下甌村瀬々野浦集落とを対象とした、実証的な研究が行われ、その成果が発表されてきている¹¹⁾。また、以前にも、甌島出身者の郷友会と母村とを対象とした研究¹²⁾が行われていたことを、その後、筆者は知ることになった。

そこで、これらの研究による成果と今後の課題について、筆者なりの考えの下に整理をしておきたい。

1. 松本・丸木らの研究

この研究は数人の研究グループによる共同研究であり、その全体が一つの成果として切り離せないのかも知れないが、ここではあえて筆者なりの観点から、いくつかのポイントを抽出してみたい。筆者が成果と考えるポイントの第1は、人の往来についてふれ、移住が必ずしも村から都市への一方方向ではないことを検討し、指摘した点である¹³⁾。別の角度から言えば、村(集落)は移住者(離村者)の「生活世界」の一部であるとさ述べているのである。この点は、筆者がかつて述べた「居住の空間構造」の考え¹⁴⁾に近いように思われる。

ポイントの第2は、政治活動の分析に関連している。郷友会は村と尼崎双方の議員等の選挙、また、村の発展のための政策やその実現にかかわっており、単に親睦を行うにすぎない受身的なものではなく、積極的・活動的な団体になっていることを明らかにした点である。

ポイントの第3は、ききとりの方法から、複数の個人史を明らかにして報告¹⁵⁾し、移住のプロセスをより具体的かつ確かなものに行っている点である。

第4は、文献による国際比較を行って、同種の現象の中での位置づけを試み、国際的には「何ら新しい現象ではない(nothing so new)」¹⁶⁾とした点である。

次に、今後の検討課題であろうと筆者が感ずるいくつかの点について、ふれておきたい。

第1は、「家の存続」の程度の問題である。報告によれば、長男の場合は離村しても出稼ぎ程度であって、家を守る傾向が強く、従って、村の家屋を売ることもなければ、墓を移すこともなく、他方、村では空家であっても村費を徴収することを決めていると言う¹⁷⁾。

たしかに、こうした傾向が強いことは筆者も感じており、筆者の報告¹⁸⁾でも、この点についてふれているが、奄美の離村者の場合には、年月がたつとともに家はくずれ、また、墓についてもこれを都市部へ移したという話は必ずしもめずらしくはないことを聞いており¹⁹⁾、家の存続の強さがどの程度のものなのかこれを決める諸条件や地域差等について、検討の必要があるように思う。

第2は、郷友会の活動と政治活動との関連の問題である。少なくとも西山郷友会の場合、選挙の際に会員が動くことが報告されており、筆者も同様の話を聞いている。しかし、こうした活動のどこまでが郷友会員としての活動なのであろうか。

筆者が行った関西にある徳之島の各郷友会に対する調査でも、「会としては選挙にかかわらないことを了解事項としている」会が半数もあり、さらに、このことを規約で決めている会すらある²⁰⁾ということは、会員が政治活動を行うとしても、それは個人または後援会員、政黨員等としての活動であって、会の活動ではないのだと言えなくもないのではないか。つまり、こうした政治活動は誰でもできるのである。

ただ、会員としての日常的な結びつきが、これらの政治活動を行う際に生きてくるということはあるだろうし、また、そうであるからこそ会の活動を重視するということが、とくに一部のリーダー層の中で生まれることがあることも否定できないだろう。しかし、だからと言って会活動イコール政治活動であるとか、さらに、政治活動が郷友会活動の一部であるとみることも、一般的にはでき

ないのではないか。両者は基本的には別であって、ただ郷友会という組織が、選挙の際などにはかなり有効に機能する側面や体質をもっていると捉える方が、より厳密な捉え方ではないだろうか。

とは言え、先にみた徳之島の郷友会で、選挙に関して了解事項を確認しているなどのこと自体が遂に会と選挙との少なからぬ関連を示しているともみることができ、また、後にみるように、政治活動を会の機能の一部と捉える考え方もある²¹⁾。さらに、筆者も、この点をめぐる処理の如何が会の盛衰に影響を及ぼした話も聞いており、また、これらのことが会によって異なることも考えられる。更に検討が重ねられるべき課題の一つであろう²²⁾。

第3は、国際比較の問題である。森川は、農村と都市の双方にかかわりを持ち続ける移住者のような現象は、世界の様々な地域で報告されており、そこでは、郷友会 (voluntary associations) が重要な役割を果たしていることがきわめて一般的であると述べている²³⁾が、そこで氏が引用している文献は、アフリカ人および中国人などに限られているのではないか。他方、在京県人会の調査を行った園田²⁴⁾も、国際比較について言及しているが、そのほとんどが華僑およびインドネシア人のケースであって、ほとんど第三世界の人々の言及に限られているのではなかろうか。

これ以外の世界の人々の場合はどうなるかやはり、国際比較と言う場合には、検討課題の一つとなるだろう。

近年、筆者が滞在したロンドンのケースについて多少ふれておくと、ボランティアアソシエーションの形成については必ずしも明確ではないが、セグリゲーションや集住傾向を示した集団として、古くはアイルランド人、次いでユダヤ人が、ロンドンのイーストエンドを中心に集住したことが知られており、主に戦後ではキプロス人、アフリカ系カリブ人、インド半島からの人々 (インド人、パキスタン人、バングラデシュ人)、中国人、アフリカ人、アラブ人などの集住現象が知られていて、このうちアラブ人については、筆者も報告したことがある²⁵⁾。こうしてみると、やはり第三世界からの人々に集住傾向が強い²⁶⁾とは言うものの、少なくとも以前には、第三世界以外の人々の場合にも、さらには、イギリスの国内移動の場合においても集住現象がみられたのであり、集住現象は、第三世界だけの現象ではないと言うことができよう。

一般に、欧米では、こうした研究はエスニック・マイノリティーの研究として行われており、郷友会研究とマイノリティー研究との関連や整合性が、国際比較を行う場合、問題となるだろう。

2. 奥村の研究

1970年代前半に行われた氏の研究は、尼崎における甌島出身者の郷友会 (「擬制村」) の凝集要因、すなわち連体性の強さを検討したもので、この点は郷友会研究の中心的なテーマの一つであり、ここに焦点を当てたことが、まず評価されよう。この要因として、氏は離島性 (母村の封鎖性) と母村の共同体規制とをあげており、とくに、後者では江石集落の共有地制度 (割地制度) の存在という共同体規制の強さに、凝集性の強さの原因を求めている。

しかしながら、母村における共同体規制の強さが、都市部で形成される郷友会の凝集性の強さを高めているという考えは、仮設にすぎず、「結論は引き出せない」と本人も述べているように凝集性

を強める一つの要因とはなり得ても、決定的要因とは言えないであろう。というのは、たしかに離島の場合には、母村で割地制度が最も強く存続した江石の出身者が、関西でも結集力の最も強い江石会を作っているが、奄美の場合を考えてみると、このような共同体規制の強さがなくても強い結集力を示す会が少なくないように、筆者には思われるからである。喜界島の小野津²⁷⁾や徳之島の手々などがその一例としてあげられよう。

氏はまた、郷友会(「擬制村」)の持つ諸機能について検討し、会が単なる心情共同体ではなく、「媒介的機能」(社会福祉的機能など)や、「生活拡充的機能」(政治的機能など)の積極的な機能をも持つもので、こうした点からみると、郷友会(「擬制村」)が「郷土愛とはかかわりのない所で、その組織を充実させながら発展しているようにも思う」²⁸⁾と述べ、発展、活発化の方向をも見ており、この点も、こうした対象がそれほど注目されなかった当時の状況を考えると、なおさら評価されることであろう。

ただ、氏の言うこれらの諸機能の言葉の概念は適当であろうか。筆者にはどうもあいまいであるような気がする。また、政治的機能の捉え方については、先に論じた通りである。

第5章 結語

以上、甌島の人口現象の一側面の解明と甌島の出身者集団＝郷友会を直接の対象とした研究の若干の整理を行った。近年の日本社会の「国際化」や外国人とくにアジア人等の日本への来住という新たな状況の中で、移住や郷友会などの現象はますます注目され、これらを対象とした研究も増えており、その視点も多様化してきているように思う²⁹⁾。

一つには、こうした研究動向の整理がさらに必要であろう。また、研究視野を国際的に広げていくと同時に、日本社会における研究の深化を行ってゆくこともとくに我々には必要であろう。また、別稿でも述べたように、「郷友会という現象は、現代史の中における一つの社会的・経済的・地域的現象であって、その研究は以上の諸方面、諸学から総合的に解明されるべき問題性をもつ研究対象」³⁰⁾であり、とくに、地域や空間の視点をもつ地理学からのアプローチが不可欠であるという点も強調しておきたい。地理学内部での方法論に関する議論ももちろん必要ではあるが、現実の対象や諸問題に取り組むことこそが、第一義的に重要であり、そうでなければ、地理学はいつになっても強くはならないであろう。

(9月13日)

注

- 1) Emrys Jones, John Eyles (1977): An Introduction to Social Geography. の第1章 Social Geography -A Group Approach 参照。なお、社会地理学について、John Eyles は「空間における社会諸現象の分析」と「人文地理学辞典(第2版)」(1986)で述べており、また、Peter Jackson は「空間における

社会諸関係とこれらの諸関係を規定する空間構造の研究」であると「人文地理学辞典（第3版）」（1994）で述べている。

- 2) 松本通晴（1985）：都市の同郷団体，社会学評論36-1，pp.35～47。
- 3) 里村と鹿島村は一村一集落である。
- 4) 今年も，甌州会の「故郷を語り合う集い」が，8月28日，鹿児島市の県婦人会館で開催され，約200人が参加したと言う。また，甌島4村の村長や助役らもこの集いに参加している。「南日本新聞」1994年8月29日付による。
- 5) 拙稿（1983）：甌島の過疎化と転出者の集団形成，鹿児島大学教育学部社会科教室編，『鹿児島の地域と歴史』所収，pp111～137。
- 6) 1994年7月。人文地理学野外演習として，学生とともに，下甌村及び鹿島村でききとりを行った。
- 7) 退職のほか，親が病気になった時なども少なくない。
- 8) 瀬々野浦の区長，宮野美富氏や同席くださった中村国博氏からのききとりによる。
- 9) 拙稿（1993）：奄美大島宇検村民の移住，鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）44，pp21～39において，「部連人」としての捉え方についてふれた。なお，この点については後にもふれる。
- 10) 注8）と同じ。ただ，里親制度のような方法にはもう無理があるとも彼等は述べていたことが印象的であった。
- 11) 山本正和（1988）：地方出身者と同郷団体－戦前期尼崎市における甌島出身者の事例－，同志社大学人文科学研究所紀要「社会科学」40号，pp163～190。丸木恵祐・山本正和（1990）：離島出身者の出郷と都市への定住過程－甌島「瀬々野浦」集落の事例－，金城学院大学論集140，pp113～138。鯉坂学（1991）：都市における地方出身者の団体－同郷団体・県人会－，季刊 Tomorrow. 6-1，pp27～35。など。
- 12) 奥村芳和（1974）：大都市地域における擬制村の社会的基底，関西大学大学院「人間科学」3，pp27～41。
- 13) 森川眞規雄（1991）：The Migration and Adaptation of Remorte Islanders in Osaka. 評論・社会科学41，pp22～43。
- 14) 拙稿（1993）。前掲注9）と同じ。
- 15) 森川眞規雄（1989）：離島出身者の生活史，庶民生活史研究会，『同時代人の生活史』，未来社所収，pp52～80。森川眞規雄（1987）：離島出身者の生活史－鹿児島県薩摩郡下甌村瀬々野浦の事例－，評論・社会科学33，pp145～158。
- 16) 前掲注13）と同じ。
- 17) 前掲注13）と同じ。
- 18) 前掲集5）と同じ。
- 19) 拙稿（1988）：郷友会形成母村の研究－鹿児島県瀬戸内町の場合－，鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）40，pp25～46。
- 20) 拙稿（1991）：関西における奄美郷友会の実態－徳之島出身者の各集落郷友会に対する調査から－，鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）43，pp1～19。
- 21) 前掲注12）と同じ。
- 22) この点に関しては，石原の次の業績が参考になる。石原昌家（1986）：『郷友会社会－都市のなかのムラ－』，ひるぎ社。
- 23) 前掲注13）と同じ。
- 24) 園田茂人（1992）：日本的〈疑似地縁結合〉の現在－在京県人会組織に関する調査結果から（上）－，中央大学文学部紀要，社会科学2，pp1～50。
- 25) 拙稿（1992）：イギリスにおけるアラブ人の SEGREGATION. アジア・アフリカ研究32-4（通巻326），pp2～18。
- 26) パプア・ニューギニアについては筆者も報告したことがあるが，農村部から来た都市居住者の結束力の強さや母村の人々との一体性などの点において，ある意味では，最も展型的なケースとも言えるのではなかろうか。

- 拙稿(1993): パプア・ニューギニア, ウェワクの移住者集落, 鹿児島大学教育学部研究紀要44, pp 1~19。など。
- 27) 拙稿(1990): 奄美出身者の動向と東京における Segregation の形成—喜界島小野津の例を中心に—, 鹿児島大学教育学部研究紀要(人文・社会科学編) 41, pp67~91。拙稿(1990): 奄美出身者のアメリカ移住—喜界島小野津を中心に—, 南太平洋研究10-2, pp287~303。
- 28) 前掲注12) と同じ。
- 29) 県人会の研究や華僑をはじめとしたアジアでの研究, 日本におけるアジア人, ブラジル人の研究など。
- 30) 前掲注19) と同じ。